今月の一品　平成 30 年 12 月

羽子板

今年も早いもので、もう１２月。「師走」と言うだけあって、年の瀬を慌ただしく過ごしているうちに、いつの間にかお正月を迎えていたのが、ここ数年の当館です。リニューアルを終えた今年こそは、もう少し心穏やかに新年を迎えたいものですが…。

ところで、お正月の遊びと言えば、凧揚げや独楽回し、カルタなどと並んで人気なのが羽根つきでしょう。失敗して顔に墨を塗られた経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないでしょうか。

羽根つきは、羽子板で羽根を突く遊びです。羽根を鬼や災厄などに見立て、それを突くことで新年の無病息災を祈るまじないの意味もありました。そのため、後に羽子板は、除災招福の縁起物として飾られるようになりました。

江戸時代後期に豪華な押絵の羽子板が現れると人々の人気を集め、一般に普及していきました。今日においても、羽子板市は歳末の風物詩ですし、初正月を迎える女の子に羽子板を贈る風習も広く行われています。華やかな羽子板は、単なる遊び道具に止まらず、正月らしさを演出するのにふさわしい縁起物として親しまれていると言えるでしょう。

今回展示した羽子板は、昭和２４（１９４９）年に生まれた女の子に親戚から初正月のお祝いとして贈られたものです。今のものと比べると豪奢さには欠けています。ただこの頃は、まだまだ物資が不足していた時代です。このような華やかな羽子板を入手するのは、きっと大変だったことでしょう。

それだけにこの羽子板からは、子どもの健やかな成長と幸福を願う当時の人々の気持ちが、強く伝わってくるように思えてなりません。（内沼源三氏寄贈）